催眠生ハメ完堕ち物語

いつものように引きこもってネットをしていた僕は、
最近入ることに成功した裏の世界で不思議なデーターを見つけた。

そこにはだれでもどこでも、狙った女を好きなように操ることができる
催眠術の方法がかかれていたのだ。

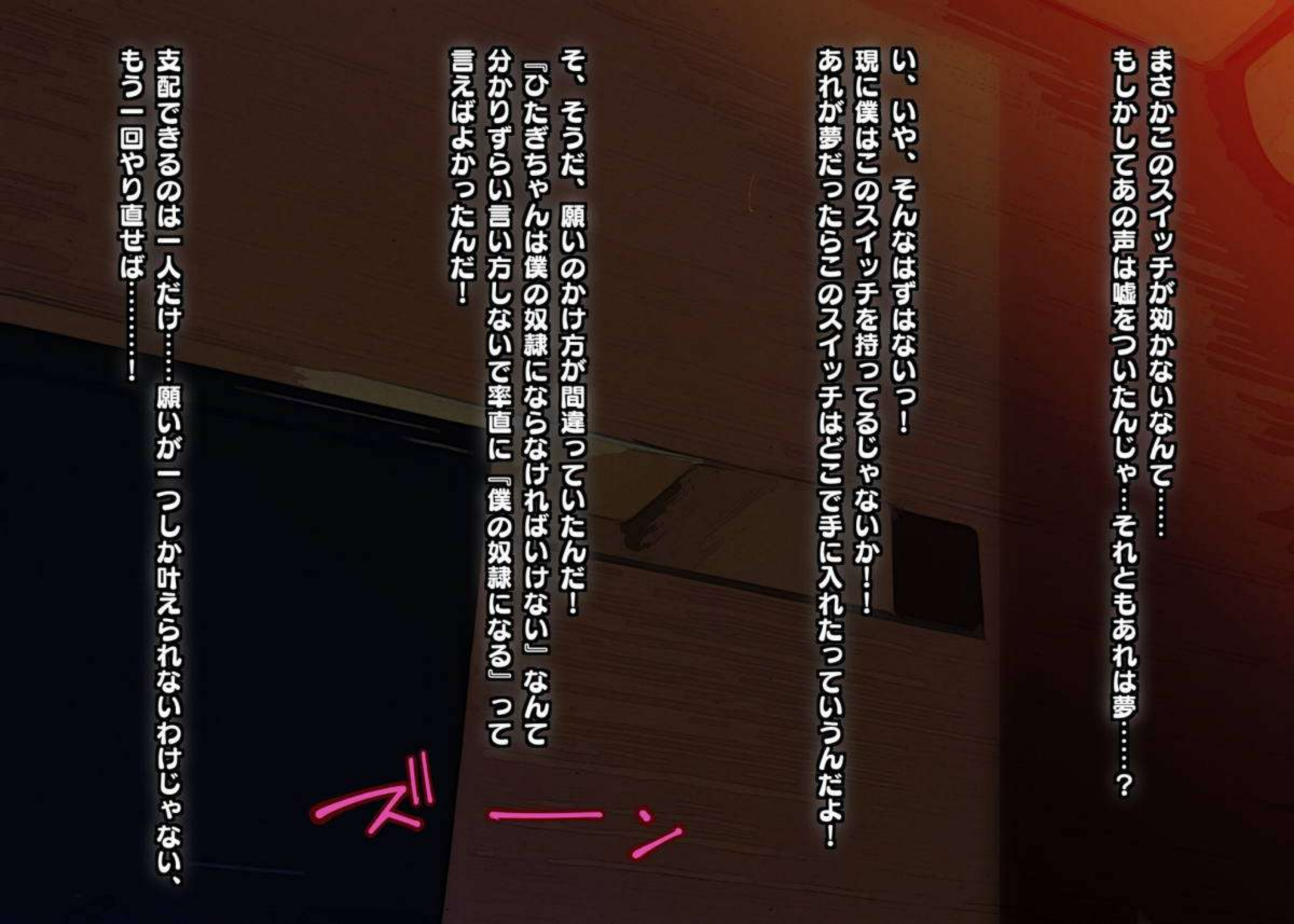
ただし、その催眠術には一つだけルールがある。
たった一人の人間しか操ることができないと言うのだ。

それを知った僕は悩んだ、
いったい誰を僕専用の奴隷に変えればいいのだろう、
誰ならば僕のチ〇ポを満足させてくれるのだろう…と。

三日三晩悩んで……ついに答えが出た。

「と、言うわけでたまたまこのスイッチを手に入れたってわけなんだよーw」
「……」
「でも操れる子は一人だけって言うからさー、誰を僕専用の奴隷にするか三日三晩悩んじゃったよ♡なんてったてこの辺りは可愛い子がたくさんいるからね♡」
「……」
「そしてついにひたぎちゃんに決めたのさ♡さぁ、早く僕の前に跪いて奴隷宣言をしておくれよ♡」

「……それで、話はもう終わりかしら？」
「ふぇっ？イ、イヤ…だから僕の奴隷に……」
「呆れた、スイッチ一つで私を手篭めに出来るなんて本当に思ってるの？
あなた正真正銘の大馬鹿みたいねw」
「で…でも僕の命令通りにホテルまでついてきたし…」
「それはあなたが余りにも怪しかったから少し調べようと思っただけよ、でもその心配は取り越し苦労だったわね、だってあなたはただの妄想クズ野郎なんですものw」
「そ……そんな……」
ジー


まさかこのスイッチが効かないなんて……
もしかしてあの声は嘘をついたんじゃ…それともあれは夢……？
い、いや、そんなはずはないっ！
現に僕はこのスイッチを持ってるじゃないか！！
あれが夢だったらこのスイッチはどこで手に入れたっていうんだよ！
そ、そうだ、願いのかけ方が間違っていたんだ！
『ひたぎちゃんは僕の奴隷にならなければいけない』なんて
分かりずらい言い方しないで率直に『僕の奴隷になる』って
言えばよかったんだ！
ズーン
支配できるのは一人だけ……願いが一つしか叶えられないわけじゃない、
もう一回やり直せば……！

「さぁ、始めましょうか」

「!!?」

バン!

『ひ、ひひ、ひたぎちゃんその格好は……!?』
『その格好って……
裸にならなければ勝負を始めることもできないでしょ?』
『勝負……?勝負って一体……』
『……はぁ?
ホント愚図ね、いちいち言われないと分からないのかしら?
この状況で勝負なんだから
『おま○こハメハメセックス 勝負』
に決まってるでしょう?』
『お…おま……こ……』

(や、やった…！願いが叶わなかったわけじゃないんだ！
しっかり催眠状態になってる…！しかも無自覚で……ｗｗ)
「ね、ねえひたぎちゃん、その格好恥ずかしくないの？」
「……恥ずかしいに決まってるでしょ、あなたみたいな社会のゴミの
前で全裸にならないといけないなんて気がおかしくなりそうよ、
でも勝負には関係ないわ、勝者は敗者を好きなようにできるんだから、
全力でかかってきなさい」
「は～～い、ところでこの勝負の名前はなんだっけ？」
「……おま○こハメハメセックス勝負よ……」
「ぶふふふふっｗｗｗ！」

「さぁ、それじゃぁ早速始めましょう♡」

パンッ！！

「うほぉおっ！？♡♡」

「うふふ、鼻息が荒いわよ、
何をそんなに興奮しているのかしら？」

「何をって……ゴクリ…
こ、これがひたぎちゃんのオ○ンコ…ピンク色で小さくて…
裏ビデオとは比べ物にならない可愛さだ…♡」

「あら、褒めてくれてるのかしら？
もっともあなたのようなゴミ屑に言われても嬉しくないけど」

「それにしても裸になったくらいでこの慌てぶり…
これならセックス 勝負の私の勝ちは間違いないわねw」

「そ、そうはいかないぞ♡
この勝負に勝って言うことを聞かせるのは僕なんだから、
まずはこの玩具でひたぎちゃんをトロトロにしてあげるよ♡」
「んっ……あら、それってローター？そんな物なら私の部屋にたくさん
あるわよ、悪いんだけど勝負にならないんじゃないかしら？」
「え、いくらでもあるって……そ、それはどうして……」
「そんなの決まってるでしょ、オナニーをするためよ、
阿〇々木君が襲ってくれないからどんどん性欲が溜まってきて…
今じゃ日に三回はオナニーしないと眠れなくなっちゃったのよ」
（すごい、普段なら絶対に言わないような秘密をスラスラと…）
「なるほど…毎日使ってるからこの程度じゃ感じないと…w
でもこういう物は使う人によって感じ方も変わるんだよ♡」

「ぐふふ、それじゃスイッチ入れるよぉ♡」

ヴィィィィィィィ……

「ふぅん……っ！」

（んぅ…自分でするときと当たってる場所が違くて……へ、変な感じぃ……）

「んっ……くぅぅっ……♡
な、なるほど…確かに全然感じないって事はないみたいね…でもこの程度じゃ私は……」

ウ〜ン

「グフフ、まだまだこれからだよ♡
狙いを変えて振動を『強』にかえれば……」

「んひょおおおおおおおおおっ!?」

（な…なにこれっ!?子宮がっ!子宮が熱くなるううううっ!）

「グヒヒ♡どうだいひたぎちゃん、気持ちよくなってきたでしょ?」

「んぉぉっ!こ、こんらの…なんともぉ…んいいいい…っ!
なんともないんらからぁ…あひぃぃ…っ!」

ウイイイ!!

「なんだそうかぁ、
それじゃぁもっと気持ちよくしちゃうからねぇ♡」

「おひっ！ひっ！んへぇぇぇぇぇっ！？」

「うわぁ、すごい大声だねぇw」

「ひぎゅうううううううっ！！
や、やめでやめでっ！もうどめでぇぇぇぇ！！」

「ぐひひ、何言ってるんだいw
気持ちよくないんだからこのくらい平気でしょ？」

「感じてるっ！感じてるからぁぁぁぁ！
本当はずっと感じてるのぉっ！んあぁっ！あぁっ！」

「らめっ！もうらめぇっ！
イクゥっ！イクイクッ！イックゥゥゥゥッ！」

「うほほっ♡イッたイッた♡♡」

ビュ♡

ビュル♡

「あひぇぇぇ……へぇ…へぇぇぇぇぇぇ…♡」

「ぐひひ、派手にイっちゃったね♡
さっきまでこんな玩具でイかないって豪語してた子は
誰だったかなぁ♡」

「う…うるはいぃ…お豆とおしっこの穴ばっかり狙ってぇ…
そんらの反則ぅ…んぁぁ…♡
セックシュならぁ……絶対に負けないんらからぁ…♡」

「うほほ、そうかそうか♡
それじゃ早速ハメハメ勝負で決着をつけようか♡」

「んうぅぅ…の、のぞむところよぉ……♡」

「はぁ…はぁ…はぁ…はぁ…はぁ…」

「グフフ♡さぁ、次はいよいよひたぎちゃんま○こに挿入だ♡覚悟はいいよねｗｗ♡」

「ふぅ、ふぅ…ぐ…愚問ね……この私があなたの汚らしいち○ぽなんかに怯える訳ないでしょ……」

「あれ、そうなの？やっぱりひたぎちゃんは度胸があるんだなぁ♡」

「う、うるさいわね、いいからさっさと入れたらどう？こんな極上おま○こを味わえるチャンスなんてあなたの人生にもう二度と訪れないわよ」

キーゃん♪

ハァ♪

ハァ♪

「よぉし、それじゃぁ一気に行くよ♡」

ズニュッ！ズズズズズチュウウウウウッ！！

「んぎぅぅぅぅ……！
い、痛っ！いたいぃぃっ！！
いだいいだいっ！いだいのぉおおおお！！」

（お、奥まで届いてぇぇ！
し、死んじゃうぅぅぅぅ……！）

ズニュー!!

ぐぐぐ！

んぐぅ

ギチ
ギチ
うぅ
んぁ
「ヒギィ…いぃぃ……んぎぃぃぃぃぃ……！」
（い、痛いぃぃぃ……！
しょ、処女を失う痛みがこんなに大きいだなんて…
痛すぎて…あたま割れそうよぉぉ……！）
「うほ♡まさかひたぎちゃんが処女だったなんて…
感激だぁ♡も、もう少し優しくしてあげたほうが
よかったかなぁ……？♡」
「う…うるさいわね…余計なお世話よぉ……！
しょ、勝負の途中に遠慮はいらな……んいぃぃ……！」
「そうだよねｗそれじゃぁ動かすよ♡♡」
ぺくん！

ズチュ！ズチュ！ジュ！ジュブブ！ズチュ！

「んひぃっ♡ひぃっ♡はひゅ♡んっ♡おひゅぅぅぅっ♡」

（う、嘘っ…なんで？さっきまでは痛いだけだったのに…もうちっとも痛くない……そ、それどころか…）

「グヒヒィ♡ひたぎちゃん声の調子が変わってきたなぁ♡もしかして気持ちよくなっちゃった？♡」

「な、何言ってるの！？そんなわけないじゃ…ひぃんっ♡」

ズコ

ズコ

あっ

んあ

ぺく

ぺく！

ゾクゾク

ズボ
「そうなのかなぁ？
それじゃもうちょっと激しくしようかなぁ…よっと♡」
「ひょひぃいいいいいいいいいっ！？♡♡」
「ほれほれほれっ♡どんどん突いちゃうぞぉ♡」
ズボ
ズボ
「やっ！やめっ…！動かないでぇ…っ！
ひぐっ！こ、こんな…おかしくなっちゃ…ひぎぃいっ！」
「あひっ！ひっ！ひぃいいっ！
ち、ち○ぽが子宮を突き上げてりゅうううう！！」
ゾクゥッ！

ズゴ！

「あひぃぃっ♡ら、らめっ♡もうらめぇぇぇぇっ♡♡」

ズゴ！

「よぉし、まずは一発注ぎ込んじゃうぞぉ♡」

ズゴ！

「ひぃぃっ！そ、それはダメェェェ！！」

「だめっ！だめだめっ！
中に出すのはあの人以外は絶対にダメぇぇぇぇ！
勝負だからってそれだけはダメよぉぉぉぉ！」

ズゴ！

「うるさい！弱点を責めるのは勝負の鉄則だろ！
僕の精液をひたぎま○こにたっぷり注いでやる！」

ヒィ

ぐゃ

「おほぉぉぉおおおおおおおおおおおっ♡♡」
(うそぉっ!うそうそうそぉぉぉぉっ!
イッてるっ!?イッてるぅぅぅぅぅぅぅっ!?)
「ぐひょぉぉぉぉっ♡
ザーメン絞りとられるぅぅぅぅぅぅぅぅ♡」
「いやぁぁぁぁぁぁぁ!やめてやめて!やめてぇぇぇぇ!」
ゾクン
ひょっ
おうっ

「んひゅぅぅ…♡ほひっ♡ひっ♡ふひぃぃぃぃ♡」

（な、なに今の？全身の感覚がおま○こに集まって…こんなの今まで味わった事ないぃ…こ、こんなのわたし、頭が…おかしくなりゅぅぅ……♡）

プシューーーーーー♡

「うほぉっ♡見て見てひたぎちゃん♡お股から黄色いおしっこ漏らしちゃってるよ♡」

「い…いやぁぁぁぁ……見ないで……見ないでよぉぉ…やだぁぁ…こんな情けない姿を晒すなんてぇ…こんなの私じゃないぃぃ……！」

ブシーー♡

ハヒ♡ヒィ♡

ゾクゾク♡

ハヘェェ

パチュ！パチュ！パチュパチュパチュッ！

「んひゅっ♡ひっ♡んっ…♡んっ、んっ、んっ♡」

「くぉおおおおおおおっ♡
ひたぎちゃん♡ひたぎちゃんっ、ひたぎちゃん♡」

ズコ

ズコ

ズコ

ゾク

ゾク

あっ

んっ

「ふぉおおおおっ♡
イクっ♡イクよぉおおおおおっ♡♡」
ビュブルル!

「はぁ…はぁ…はぁ…はぁ…♡」
「ふほぉ♡気持ちよかったぁ♡ひたぎちゃんも良かったでしょ♡」
「……べ、別に……
こんなのどうってことないわ……」
「えぇ、本当に？」
「あ…当たり前よ…あなたの様な童貞の乱暴なセックス…
こ、これ以上イカされるわけないっ……♡」
「そうか分かったよ、それじゃ僕とひたぎちゃん
どっちが先に降参するか正々堂々ハメハメ勝負だｗｗ」

【十分後……】
「んぅっ！んっ！んうぅぅっ！んっ…うぅぅっ！」
ビク！
（んふぅぅくっ……だ、大丈夫…っ！
最初はこいつのセックスに主導権を握られていたけど、
集中すればなんとか快感に耐えられる…っ）
「グフゥ♡思ったより我慢するねぇ♡
それじゃぁ僕ちょっとだけ本気出しちゃおうかなぁ♡」
「ほ、本気って…強がり言うのはやめて…ひんぅっ♡
もっ…イキそうで…どうしようもないんでしょ…っ！
んひっ！ひぁぁっ！♡♡」
ズ！
ズ！
ズ！
ズ！
ズ！

【1時間後】

「ひぉぉぉぉんっ♡ひゃひぃぃっ♡
にゃ…にぃぃぃっ♡にゃんらのぉぉぉぉっ♡♡」

「どうしたのひたぎちゃん♡
声が荒いよ？もうイカないんだよね？」

（い、いやぁぁぁぁっ！な、なんでこいつ一度もイカないで
ハメハメし続けられるのぉぉぉっ！？）

（グヒヒ♡願い事はひたぎちゃんが僕の性奴隷に
なることだからね、僕には絶対に僕には勝てないんだよ♡）

ズブッ！

ズブッ！

ズブッ！

ズブッ！

ぉぉ

ぉぉ

「ひぎぃぃぃぃぃぃぃぃっ♡
やっ♡やメッ♡もう許ひれぇぇぇぇぇっ♡」

「許して？それじゃ負けを認めるのかい？」

「認めるぅぅっ♡認めましゅうううっ♡
負けを認めましゅがらぁぁぁぁぁぁぁっ♡♡」

「ぐひひ♡それじゃ一発イッてもらおうかっ！！」

ズッボ

ズッボ

ズッボ

ぎぃぃ

ぃぃぃ！

おお！

「ひょひぃいいいいいいいっ!?♡♡」
（おほぉおおおっ♡
イキュッ♡イキ死ぬぅううううっ♡）
ビュブーー!!
「グヒヒ♡僕の性奴隷なら命令通り何度でも絶頂しなw」
「しょ…しょんらぁ……ひ、酷いいいいい……
んひっ♡ひっ♡ひほぉおおおおおおおおおおおおっ♡♡」

「おひょぉぉ♡ほっ♡おひょ♡ほぉぉぉぉ……♡」
「あ……あひぃぃ…♡ま…負けれしゅうう…♡
あなた様のお○んぽに……完敗しまひらぁぁぁぁぁ♡」
「あれだけ偉そうに構えてたくせに情けないなぁw
負けを認めたからにはひたぎちゃんは僕の性奴隷だよ、
分かってるね♡」
「はひぃぃ……い、今からひたぎは……
ご主人しゃまに絶対服従を誓いましゅううう……♡」
「グヒヒ♡それじゃご主人様の命令だ、もう二、三発ハメようね♡」
「ひぃぃっ…！ゆ、許ひれぇぇ……っ！」

「グフフ♡今回はこのくらいにして上げるよ♡
さぁひたぎちゃん、僕の息子を綺麗にお掃除してね♡」
「んっ、顔に近づけないで…く、臭いっ…♡」
ズイ！
ズイ！
「どうしたんだい？
まさかご主人様のチ○ポを舐められないなんて言わないよね？」
（あぁ…どうして…？この人に命令されると逆らえなくなる…
オ○ンポを舐めることが当たり前に思えてきちゃうわ…♡）
「え、ええ…もちろん舐めるわ…♡
セックスの後のチ○ポ掃除も敗者の大事な役目ですもの♡」

「ん……ちゅ……ちゅるぅ…ちゅ……ちゅっ……ずちゅぅぅ♡」
「ほぉ…おぉ……いいよぉ、裏側気持ちいいよい♡」
「ちゅるぅ…んっ、ホントかしら？
こんなの初めてらからよく分からなくて…ちゅ、ちゅるるっ♡」
「くふぉ♡ひたぎちゃんの小さな舌が僕のチ○ポを
這い回してる♡さ、最高の気分だよ♡」
「んちゅ…大げふぁね、あなたはこのわたひに勝利したご主人様
なんらから…ご奉仕を受けるのなんて当然れしょ…ちゅぅぅ♡」
「ぐひひ、そうだったね♡
それじゃお言葉に甘えてもっと激しいの貰おうかなぁ♡」
びくびく
れちゅ
ちゅるるっ

「おらっ、喰らえっ！ｗｗｗ」
ズボ!!
「おぼぉおおおおおおお
おおおおおおおおおおおっ!?」

「うぐっ！ぼげっ！んっ、うぶぅっ！おぶぅ！
おぶっ！おぶっ！おぼっ！おぶっ！ごぶぅぅっ！？」

「おほぉ♡ひたぎちゃんのロマ○コあったかぁい♡」

「おごっ！？んっ、んんぅぅぅぅぅぅっ！」

ボズズブ！

（ぐ、ぐるじ…喉の奥まで届いてるぅぅ！？
ご主人様のオチ○ポなんて大きさ…こ、こんなの暴力…！）

「ほらしっかりしろ、口から出すなよ、ゲロ吐くなよ？
ちゃんとチ○ポに集中して僕をイカせる事だけを考えるんだ」

（そ、そんなの無理ぃ！無理よぉぉぉぉぉぉっ！！）

んっ

ズニュウ

ムグッ

「ほらほら、スピードアップだw」

「んぼおおおおおっ！おぼっ！ぐ、ぐるびっ！
おげっ！げぇっ！おぼべぇぇぇぇぇぇぇぇっ！？」

ズボ！

ズボ！

おごぶ

（の、喉が圧迫されでるぅぅぅぅっ！
このままじゃ窒息しちゃうわよぉぉぉぉぉぉ！？）

「オラオラオラ！どうだ苦しいだろう？
そのまま死んじまいなっww」

「うぼぇぇぇっ！んぶっ！んぶぅぅぅっ！だ、だずげぇぇぇ！」

ズッ

ズボ！

「ふぉおおおっ♡イクよ♡
ちゃんと全部飲むんだよっ…おぉ…おぉおおおおっ♡」

ビュル！

「うぶぅうっ!?おっ!おぼっ…
ふごおおおおおおおおおっ♡♡♡」

（んりゅうううううっ♡
喉の奥に熱いのきてるうううううっ♡）

「んひぇぇぇ…へぇ♡へひぃい♡ひへぇぇぇぇ……っ♡」
「ご…ごひゅじ…はま……じぇ、じぇんぶ飲みまひらぁぁ…♡」
「おほっ♡そうかそうかw
それじゃぁ口を開けて見せてごらん♡」
「ふぁ…ひぃ…♡……んぁぁぁ……♡」
おごご
ゴブゥ
ドロ～
「うーん、少し残ってるけど…初めてにしてはよくやったね♡
褒めて上げるよ♡」
「んひぃい♡あ、ありがとぉがらいまひゅぅぅ♡」
ビクビク
（あぁ…全身に喜びが染み渡るようだわ…♡勝負に負けて従ってるだけなのに…ご主人様に褒められるのがこんなに嬉しいだなんて…
こ、この方は一体何者なの…？）

「ふぁ……う、嘘……ご主人様のオ○ンポ……」
「グヒヒ、全然小さくならないねぇ♡
本当はこれで終わりにするつもりだったんだけど…
悪いけどもう一回使わせてもらおうかなぁ♡」
ハァ…ハァ…
「うぁ……そ、それは……」
（あら、私ってば何を考えてるの？
この方に命令されたら言うことは一つに決まってるじゃない♡）
「は、はひっ♡喜んでご奉仕させていただきますぅ♡
どうぞ私の穴という穴を、全てご主人様の専属になるようお掘りくださいませぇ♡♡」

【一週間後、○○学園の屋上】
「あなたがメールの差出人…わたしに何かようかしら？」
「やぁやぁ待ってたよひたぎちゃ～ん♡
最後に会ってから9時間も経っちゃったんだから、寂しかったでしょ？」
「……あなた何いってるの？
私があなたと会うのは今が初めてよ、その不細工な顔、
一度会ったら忘れるはずないでしょ」
「ぶひひっ、冷たいなぁ♡
まぁ一度記憶をリセットしたからね、分からなくて当然だよ♡」
「でも……この動画を見れば少しは思い出せるかもよw」
ヒュオオ…

『おほーっ♡ご主人様っ♡ご主人様ぁぁぁぁぁぁぁっ♡♡』

「う…嘘…なによこれ……こんなの知らない…わ、私こんな事してないわよぉ…」

「グフフ、これが真実だよwこの後もひたぎちゃんは毎日僕とハメハメしてたんだよ♡」

「ふ…ふざけないでっ…!こ、こんなの合成…そ、そうよ、合成に決まってるわ…!そうじゃなきゃあなたみたいな気持ちの悪い男とこんな事するはずない…っ!」

「えー、僕との思い出を否定するのぉ?ちょっとショックだなぁ♡」

ブルブルブル

ムニュウウウウ♡

「んうぅっ…！な、何するの……っ！？」

「グヒヒ♡やっぱりひたぎちゃんのおっぱいは触り心地がいいなぁ♡
ひたぎちゃんも僕に触られるの大好きだもんねー♡」

「くぅっ！き、気持ち悪い手で触らないで…っ！
あなたのようなゲスに触られて嬉しいはずない…んっ！や、やめなさい…っ！」

ぴくん

レロン

「それじゃぁこっちにしようっと♡」

「ひぃいいっ！い、いやっ！いやぁぁぁぁぁぁぁぁ！」

「こっ、このぉ！やめなさいっ！その汚い手をどけて…っ！くぅぅぅ…こ、こんなのおかしいわよぉっ！！」

「ブフフッ♡おかしいって言うけど、そもそも大した抵抗もしないで服を脱がされてる自分をおかしいと思わなかったの？」

「……っ！そ…それはっ！！」

「実は意識をハッキリさせてるだけで身体は僕の自由なのさ♡だから抵抗してもムダなんだよ♡さぁ、わかったら続きをしようねー♡」

「ほーら、僕らの甘いメモリーをもう一回見ようね♡」
『んほぉおぉおぉおっ♡いいっ♡いいれすご主人様ぁあぁあぁあっ♡♡』
「い、嫌ぁあぁあぁあっ！やめてぇ！そんな物見せないでぇぇえっ！」
（こ、これが…このどうしようもなく淫らに鳴いているハレンチな女が本当に私なの？
全く記憶にないのに、この声を聴いてるとアソコが熱くなる…っ！）
「ぐひひ♡身体が熱いよぉ♡マゾの血が抑えきれないのかなぁ？」
ギュ！
くに
くにっ
びくびく

「んあああああああああああああああっ♡♡」
『ほらほらっｗここがいいんだろ♡ひたぎちゃんの身体の事なら
もう全部お見通しなんだからねっ♡ｗｗ」
「いやっ♡いやいやぁっ♡そこ虐めないでぇぇっ♡
んひぃぃっ♡や、やだぁぁ♡こんな指で気持ちよくなんてなりたくないのにぃ…！
あひゃ♡ひぎっ♡ひんっ♡ひんんぅぅぅっ♡」
（いやぁぁぁぁぁぁぁぁ！なによこれっ！？
なんで私こんなに感じちゃってるのぉ！？こんなのおかしいわよぉぉ！）
ずにゅ
ずにゅ
ぐにゅ
くにぃ
あぁっ
おっ

「いやっ！いやぁぁ！イクっ！イかされるうううううううっ！」

「んほっ♡ほひっ♡
ほひょおおおおおおおおお♡♡」

「おほっ♡イッたイった♡しかもオシッコのおまけ付きだｗｗ」

ぐぐぐ！

ぐぐ…！

ぐぐッ！

プシュウウウウウウウウウ！
「ひぅぅぅぅ…い、いやぁ…おしっこ出るっ…お漏らししちゃってるぅっっぅ…！
あぁ…止まらないぃ…！」
「うほ～～♡どんどん出てるよぉ♡
ひたぎちゃんの尿道は本当にユルユルなんだね～～♡」
「あぁぁぁぁ…！や、やだっ！見るな！見ないでぇぇぇぇぇぇぇ！！」
（い…嫌ぁぁぁぁぁぁ…気持ちよすぎてお漏らししちゃうだなんてぇ…
しかもこんなゲスの前でぇ…これなら死んでしまった方がまだマシよぉぉ…！）
ハァ
ハァ
んく
んく
ビュ～～

「ううう……こ、こんな屈辱……い…やぁぁぁぁぁ……！」

「あれ～、ひたぎちゃん壊れちゃったのかな？ｗｗ」

「あ、あなた一体なんなのよぉぉ…！なんの恨みがあって私にこんな事をするのよぉぉぉぉ！？」

「まぁいつもは催眠状態でセックスしてたんだけど、ひたぎちゃんに夢中になる程それだけじゃ満足できなくなっちゃったんだよねぇ♡身体だけじゃなく心も完全に僕の所有物にしたいんだ♡」

ブルブル！

（こ、こいつ目が本気……本気で私を堕とすつもりでいる…っ！そしてこの男にはそれをする力が……こ、怖いっ…助けて…助けて阿○々木君…っ！）

ズンッ！

「くぅぅ…んぅ…ぅぅぅ……き、キツイわ…早くほどきなさい……っ！」

「グフフ♡どうだい、解けそうで解けないでしょ？ｗｗ」

「こ、この卑怯者っ……！
縛らないと女の身体にも触れられない様な軟弱者のくせに
よくもこの私を……っ！」

「忘れたの？僕が本気になれば君の身体なんて簡単に操れるんだよ？
それをしないのは単にこの状況を楽しみたいからだよｗ」

（く…バカにしてぇ……こいつ完全に私の身体で遊んでるわ…っ！）

「グフフ♡悩しそうなひたぎちゃんを激写～～♡」

ピピッ…カシャカシャカシャカシャカシャカシャ……！！

「ちょ……！や、やめなさいっ！撮らないでっ！撮るなぁぁ！」

「そんなこと言われてもこの淫乱ボディを目の前にするとなぁ♡第一ひたぎちゃんのエッチな姿はもう何百枚も保存済みだよ～～♡」

ヒビッ！

ヒビッ！

「うぅぅ……こんなの……最悪よぉ……」

（最低…もう最低よぉ……なのに、子宮の奥がキュンキュン言ってる…！こ、これって何なのぉぉ……）

「さてと…次はお待ちかねのオ○ンポ様だよ～～♡」
「ひっ！ひいいいっ……！？」
（な、何よこの大きさ…太くて…下手したら私の顔よりも長い…っ
こ、これは生殖器なんかじゃない…女を壊すための凶器よ…っ！）
ズイ！
「む、無理っ…ムリムリッ…！無理よっ！
こんなの入りっこない…これでセックスなんて出来るはずがないわ！」
「大丈夫だってw
ひたぎちゃんは昨日もこれを咥えてアンアン鳴いていたんだから、
入れればすぐに気持ちよくなれるよ♡」
ドキ！
「ひっ…！そ、そんなの無理っ……無理よぉおおお……！」
（わ、分かるわ…これを挿入されたら絶対におかしくなるって……
もう二度と彼の元に戻れなくなっちゃう…
そ、それだけは絶対にイヤッ！）

「いやぁ…セックスなんてしたくないいいいい…！
お…お願い…お願いだからぁ……うぅ……グスッ…グスッ…
もう……許してぇぇ……」
「うひょー、泣いてるひたぎちゃん可愛すぎるー♡
でもまだダメだね、人にお願いするんだからもっと畏まらなきゃ♡」
ハァ！
ハァ！
「ひっく…うぅ…わ…分かり……まし……たぁ……」
「お…お願いします……っ、
何でも言うことを聞きます…聞きますから……それは…それだけは
許して下さい……お願いしますぅ……！」
（いやぁぁ……この私が…こんな下等な男に懇願させられるなんてぇ…
夢よ…これは夢よぉぉぉ……！）
「グヒヒ、最高の気分だ…それじゃぁ言う通りにしてあげようかな♡」
やぁ！
ぐぐぐ…

「でもダーメ♡」
「おひょおおおおおおおおおおおおおおっ♡♡」

「おひょおおおっ♡♡
ひっ♡んひょおおおおおおおっ♡♡」

ズボ

ぴくっ!

ズボ

ズボ!

ぎゅ

（んやぁぁっ！頭に何か流れ込んでくるううっ！
いやぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！
な、何っ！？この記憶はなにぃぃぃぃっ！？）

「おひぃぃ…ひぉぉぉ……ほひぃぃぃぃ……♡♡」

「おほ♡もう絶頂したの？
ビックリしてチ○ポ抜いちゃったよぉ♡」

ゾクゾク

（お…思い出した……
私の身体…もうとっくにこの男の物になっていたんだわ…）

「ひぅぃぃ…嫌ぁ…ほ、本当に犯されてた……
このチ○ポに調教されていただなんてぇ…そんなの嫌ぁぁ…！」

「あれ、ひたぎちゃん記憶を取り戻したの？」

「ぐひひ♡まさかハメただけで記憶が戻るなんて…
記憶を消しても身体は僕のチ○ポを忘れられなかったんだねぇ♡」

「ひっぐ…許さない……あなたの事は絶対に私の手で刺し殺してやるぅ…！」

「あぁ、その全てに絶望した様なアヘ顔いいなぁ、最高に興奮するよ♡
これは記録に残さないと♡」

（くそぉ…私の言葉なんて少しも聞いてない…
もう私の事は全て支配したと思っているんだわ…っ）

ビッ
ビッ
ビッ

「さぁ、マ○コがよく見えるように足広げろよ」
「ふぅ…ふぅ…ふぅ…は、はいい……」
（あぁ……な、何でなの……？
こ、この人に命令されると…
身体が震えて…どうしても逆らえなくなるっ…！）
「グヒヒ♡ビラビラのエロマ○コが丸見えだぜ♡
プライドの高い生意気女もこうなったら無様なものだなw」
「うぅ…い、言わないでぇ……」
（ダメ…言い返す事もできない…
この人には勝てないって身体が覚えちゃってる…！）
くぱぁ
ハァハァ
ミキミキ

「んくぅ……はぁ…はぅぅん……♡」

「ほらほら、オ○ンポ欲しいんだろ？
それなら雌豚らしくおねだりしないと♡」

「ふ、ふざけないで……チ○ポ…チ○ポなんて……
ほ…欲しくなんて……ないぃ……ないんだからぁぁ……」

「本当に？ほら見ろよ、この逞しいチ○ポをよぉ♡」

「ひぃぃっ…！やめぇ…チ○ポ見せないでぇ…
そんなの見せられたら…わたしぃ…♡」

（あぁ…なんて大きなオチ○ポ…カリも反り返っていて、
あれで突かれたら……わたし……♡）

ひっ

ドキ！

ゾクン！

「はふぅ…ふぅぅ…チ、チ○ポ…オ○ンポォ…♡」

（ぁ…ぁぁ…頭がポーッとしてうまく働かない…
分かってるのはオチ○ポ欲しいって事だけ…
ダメェ、もう我慢できないぃぃ…っ♡♡）

「お、お願い……あなたの……」

「ご主人様だろ？」

「ご…ご主人様っ……も、もう我慢できないんですぅ♡
どうか…どうか私の卑しい雌マ○コに…ご、ご主人様の
雄々しいオチ○ポをあてがって下さいませぇ♡」

ギュ！

びくん

びくびく

「ほら、お望みのチ○ポだぞっ♡」

ズボォ!

「いっひぃいいいいいいんっっ♡♡」

（おほぉおおおおっ♡きたぁぁぁぁぁぁっ♡
クズ野郎の極太オ○ンポ一突きで子宮口まで
ズッポリ刺さっちゃたぁぁぁぁ♡♡）

びくびく!

おごぉ!

びくん!

「んひぃっ♡ひほぉっ、ほおおおおおおんっ♡
ひぃっ♡気持ひいいいいいっ♡♡」

「おほーっ♡さすが極上マ○コだ、気持ちいいぞぉっ♡」

（お…堕ちた……自分からオ○ンポをおねだりしちゃったぁ♡
もう私の身体はとっくにこの男に堕ちて……
いいえ違うわ…堕とされたいって思っちゃてただわ…♡）

「きっ、気持ちいいれしゅううっ♡
ご主人様のチ○ポしゃいこぉおおおおおっ♡」

ビュルル！

「オラァ！出すぞ雌豚ぁぁぁぁ！
感謝の言葉を述べながらイケぇぇぇぇ！」

「んほおおおおおおおおおお♡♡
ありっ♡ありらひょおおおっ♡
ありがとおごらいまひゅうう♡♡」

ビュルル！

「イキュイキュウウッ♡
イッキュウウウウウウウウウッ♡♡」

「きひぃぃ…♡いひぃ…おひ…えひぃぃ…♡♡」

（あへぇぇ♡あ、頭おかしくなるくらい気持ちいひぃ♡
もうダメ…こんな気持ちいいの知っちゃったらもう
この人から離れられないぃ…♡）

「やっぱりひたぎちゃんの穴は最高だなぁ♡
これからもしたい時はいつでも気軽に呼び出すから
学校でも彼氏とのデート中でもちゃんと断って来るんだよ♡」

「はひぃぃ……承りまひらぁぁぁ……♡
お手軽セックス便所ひたぎをいつれもお呼びくらはいぃぃ♡」

（あぁ…わたし…便所にさせられちゃったぁ……♡
ご、ごめんね……阿○々木くん…♡）

ひぃ♡

ハヒィ♡

ハァ ハァ

ゾクゾク

「んぅぅぅっ♡んっ♡んぅぅっ♡んむぅぅぅっ♡」

びくっ！

びくん！

ザッ、ザッ、ザッ……ガチャ

「グヒヒ、ただいま～今帰ったぞ～w」

ヴヴ

ヴ…

キィィ

「ふぅっ♡んぅぅんっ♡んぶっ♡うんぅぅぅっ♡」
（や、やっと帰ってきた…と、止めてっ♡早くこれ止めてっ♡）
「おー、1時間くらい外に出てたけどまだ意識あるのか、
思ってたより体力あるんだなぁw」
「それにしても驚いたぞ、昨日あれだけ犯したのに
まさか1日でまた反抗的な態度に戻るなんて、
ひたぎは本当にじゃじゃ馬なんだなw」
「ご主人様に刃向かうなんてちょっとムカついたから
しっかりお仕置きしないとな♡
ちょうど放置プレイもやって見たかったし、もう少し
そのまま頑張れよw」
ヴィイイイ

【1時間後】

「おんんぅっ♡んっ♡んっ♡んっ♡
んむぅぅっ♡んぅっ♡んんんぅぅぅぅっ♡♡」

「うほー♡このひたぎマジでエロいわー♡」

（や、やめてぇっ♡昨日のこと思い出させないでぇぇっ♡
オ○ンコがもっと熱くなっちゃうよぉぉ♡）

「グヒヒwこれなんかアヘ顔全開って感じで
ひたぎっぽさがよく出てるなぁw
ほら、ひたぎも見てみろよ…って、見れないかそれじゃw」

【2時間後】

「くぅっ、イクぞイクぞぉ♡顔にぶっかけるぞぉ♡」

ビュル！！

「おんっ♡ぶっ♡んうぅうぅっ♡」

「ふほ～気持ちいい♡見抜きも結構いいもんだなぁ♡」

「それにしても自分だけ気持ちよくなってご主人様に奉仕するのを忘れるなんて、そんなんじゃ性奴隷失格だぞw」

ゾクッ

ウィーン

「あひいいっ♡も、もう許ひれぇえぇえっ♡
死ぬ死ぬ死ぬっ！死んじゃうのおおおおっ♡」

「いい声で鳴くなぁ♡やっぱ口は塞がない方がいいかなw」

やらぁん

そいっ

「ほれほれもっと腰振れよ、
それじゃファンも興奮してくれないぞw」

「い、いやよぉ♡そんなファンなんていらないわぁっ♡
知らない男の人に私の無様な雌犬の姿を見られていたなんてぇ、
そんなの知っちゃたら…わ、わたひい…♡」

「グヒヒ、毎日更新してるからアクセス数がどんどん上がるぜw
俺はブロガーとしての才能があったのかなw」

「おひょおおおおおおっ♡
イッちゃいまひゅ♡イッちゃうぅぅ♡♡」

あぎ

ブシャ

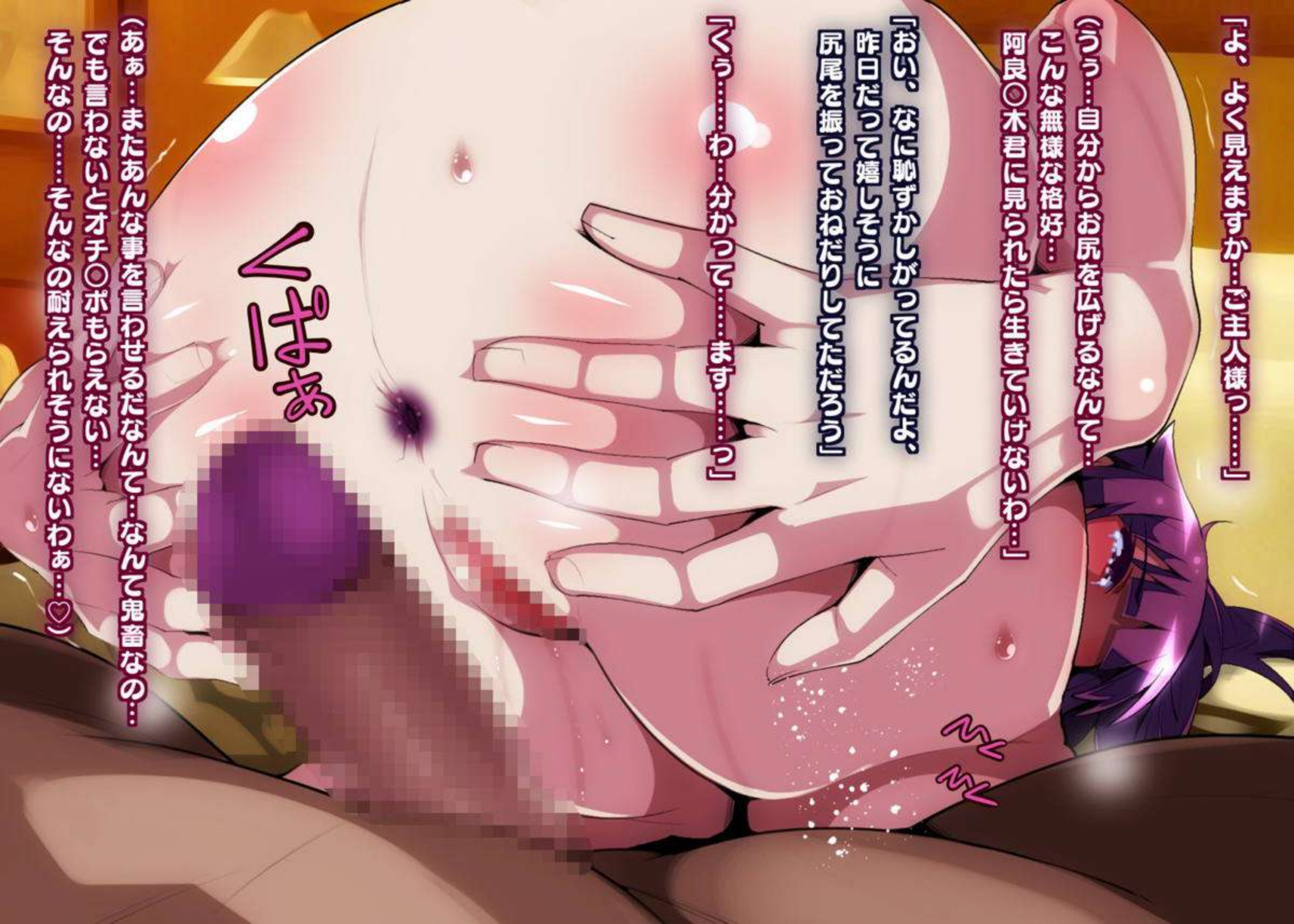
んおおっ♡

（あぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ♡
イクぅっ♡またイクのおおおおおお♡♡）

「ブフフフフwまたイキやがったw」

ゾクゾク

「んひゃぁぁっ♡はひぃ♡はひぃいいい……♡ひいいん…♡」
（あぇぇぇぇぇ…む、ムリぃ……もう何十回もイっちゃてるぅ♡
これ以上こんな目に遭わされたら…身体がもたないよぉ♡
ひぐっ
おほぉ♡
しょろろ〜♡
「グヒヒ、いい顔してるなぁ♡
やっぱりひたぎにはアヘ顔が一番似合うぞ♡」
「ひぃいん…お、お願い……さっきの態度は謝りますからぁ…
も、もぉ許してくらはいぃぃ…♡」
「そうだなぁ…確かにお仕置きは十分だし、
よぉし、罰は許してやる、これからはご褒美に気持ちよく
させてやるから残りの時間たっぷり楽しみなw」
ひくひく♡
「しょ、しょんなぁぁっ！ま、待って！
お願いだからもう許じでぇぇぇぇぇぇぇ！」


「よ、よく見えますか…ご主人様っ……」
（うぅ…自分からお尻を広げるなんて…
こんな無様な格好…
阿良○木君に見られたら生きていけないわ…」
「おい、なに恥ずかしがってるんだよ、
昨日だって嬉しそうに
尻尾を振っておねだりしてただろう」
「くぅ……わ…分かって……ます……っ」
くぱぁ
（あぁ…またあんな事を言わせるだなんて…なんて鬼畜なの…
でも言わないとオチ○ポもらえない…
そんなの……そんなの耐えられそうにないわぁ…♡）

「ご、ご主人様ぁ♡
ひたぎはオチ○ポを前にするとだらしなく発情しちゃう
変態丸出しな淫乱雌豚ですぅぅ♡」
「今もご主人様のオチ○ポを前にして、ひたぎのオマ○コは
エロエロお汁でべったりになっちゃいましたぁ♡」
「一生懸命オマ○コご奉仕しますぅ♡
雌穴フリフリしてご主人様をたくさん気持ちよくしますから
ご褒美をたくさんくらはぁい♡」
ブルルン
ひくひく

「ほひぃぃっ♡ひぉんっ♡ひんっ♡
ひひょおおおおおおおおおおおおおんっ♡♡」

ぴく！

「オラオラァ！どうだ、気持ちいいんだろ！？」

「はひぃっ♡いいっ♡いいれしゅ♡
オチ○ポ気持ちいいれしゅぅ♡ほひっ♡ほひぃぃんっ♡」

（ひぁぁぁぁぁぁんっ♡
気持ちいぃっ♡オマ○コ気持ちよすぎるよぉぉぉぉぉっ♡
こんな気持ちいいと全然誤魔化せないぃぃ♡）

ズゴズボ！

ズボ！

「全くだらしないマ○コだな、ちょっと突いたらすぐ濡れ濡れになって…おい雌豚、恥ずかしくないのか？」

（あぁぁぁぁぁんっ♡こんな奴に好き勝手言われて…
悔しいけど……オ○ンポの気持ちよさには逆らえないわぁぁ♡）

「ほーら、
良い子のひたぎにプレゼントだ♡」

ぐくん!

「おひょおんっ♡♡♡」

(な、なにぃぃっ!?
お尻に変な物突っ込まれてるぅぅっ♡)

ブジュウ!

ぐぐぐ!

おぐー!?

「いひょおおおっ♡おほっ♡
おひょおおおおおおおおおおっ♡♡」

「ひへっ♡ひほっ♡ほぉおぉんっ♡♡
しょんらっ♡お尻きもちいいっ♡
お尻の穴ズボズボされるらけでもイッちゃうぅ♡」

「どうだ？気持ちいだろう。
性奴隷なら尻穴も使えるようにならないとなw」

（い、いやぁぁっ♡ど、どうしよう、嘘じゃないっ♡
私本当にお尻で感じちゃってるぅぅっ♡）

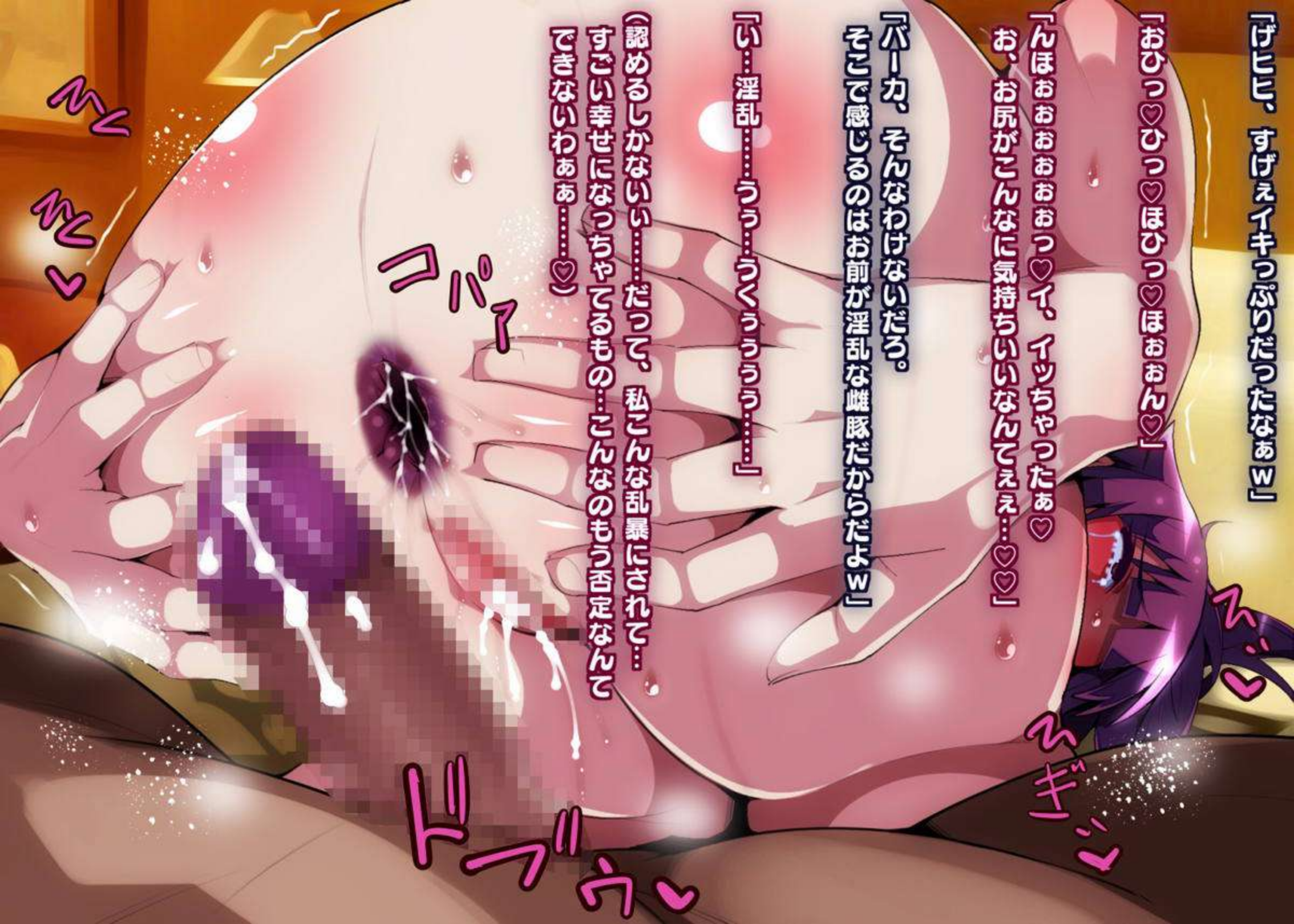
いま

くぱぁ

ズボ

ズボ

「んほぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉっ♡
お尻マ○コでイッきゅうううううううっ♡♡」
「ほひょぉぉぉぉぉぉんっ♡♡」
ビュブーー!!


「げヒヒ、すげぇイキっぷりだったなぁw」
「おひっ♡ひっ♡ほひっ♡ほぉぉん♡」
「んほぉぉぉぉぉっ♡イ、イッちゃったぁ♡
お、お尻がこんなに気持ちいいなんてぇぇ…♡♡」
「バーカ、そんなわけないだろ。
そこで感じるのはお前が淫乱な雌豚だからだよw」
「い…淫乱……うぅ…うくぅぅぅ……」
（認めるしかないい……だって、私こんな乱暴にされて…
すごい幸せになっちゃてるもの…こんなのもう否定なんて
できないわぁぁ……♡）
コパァ
ドブゥ

「ンチュウっ♡ふっ、ふぁぁ♡れちゅうっ♡
はぁぁぁぁんっ♡ご主人様しゃまぁぁ♡」

「おい、もっとベロを絡めろよ、
そんなんじゃちっとも気持ちよくねえぞ」

「は、はひぃっ♡もうひわけごらいまへんぅぅ♡」

「んっ♡ちゅるるるっ♡はっ、はふっ♡
ずぢゅるぅっ♡ぷはっ、い、いかがれすかご主人様ぁ♡」

「あぁ、その調子だ、
始めの頃よりだいぶ成長したな♡」

「はひぃ♡ありがとうごらいますぅ♡
お褒め頂き光栄れすぅ♡」

『……ガチャ！
おい！戦場ヶ原！そこにいるのか！？』
「おっと電話がかかったぞw
ほら早く出ろよ、あんまり相手を待たせるじゃねえぞw」
「はぁい♡承知いたしましたぁ♡」
ぴくん
ズッ
ズッ
「はぁはぁ…♡
こんにちわ♡、阿良〇木くん…♡」
カチャ

『せ、戦場ヶ原…よかった無事だったんだな、一ヶ月も連絡取れなかったんだぞ！お義父さんに聞いてもわからないって言うし…一体どこにいるんだ！？』
「だ、大丈夫っ…よぉっ…んぅぅっ♡心配してくれて…ありが……とぉ…っ…ひぁぁんっ♡」
『し、心配するなって…そんなの無理に決まってるだろ！？』
「はぁうんんぅっ♡ご、ごめんね阿〇々木くぅん♡わ、わたひ今忙しいから…んはぁぁんっ♡」
「あ…後でまた連絡するから…ひぅぅぅんっ♡きょ、今日は切るね…っ♡」
『忙しいって……い、今なにをしてるんだよ！？』
ズッ
ズッ
キーゃ

「わたしぃ…わたひは……わたひは…今ぁ……」
ズコ
ズコ
「ご主人様とセックスしてるの♡」
【……は？】
びくっ！
びくっ！

「んひゃひぃぃぃぃぃぃっ♡
ご主人様の極太チ○ポ気持ちよすぎるのぉ♡」

ズボ

「せ、戦場ヶ原……？
ハハハ、冗談だろ…
お前何言ってるんだよ…」

「ひぉぉぉぉぉぉっ♡
こ、こんなすごいの知っちゃたらもう阿良々木の
粗チンなんかじゃ満足れきないぃぃっ♡♡」

ズコズコ

「そ…そんな…
い、いやだ、お前
何言ってるんだよぉ！？」

あぁ♡

「ひょおおおおおおんっ♡
イクイクイクゥウ♡あなたも私の声を聞いて
絶頂ひれえええええっ♡♡」

ビュール!

『や、やめろぉっ!
それ以上はダメだあああああ!』

ビュ

ビュル!!

「もう無理いっ♡♡
んひょ♡おひょおおおおっ♡♡」

「はひぃぃ…♡ひぃん♡いひぃぃん……♡♡」
『せ…戦場ヶ原……ど、どこにいるんだ？
誰かに無理やり言わせてるんだろ？おれが助けてやるから…』
「ご…ごめんれ阿良〇木くぅん…♡
もうわたひ…あなたのところには…戻れない…
ううん、戻りたくないのぉ♡」
「っ！！？」
「私の幸せはご主人様にご奉仕することなのぉ♡
ご主人様に出会ってからはそれまでの人生が無意味だったって
はっきり分かっちゃったのぉ♡」
はへ～～
「だからもう阿〇々木君にい会いたいなんて
これっぽっちも思ってないのぉ♡
諦めて新しい女でも見つけてねぇ♡」
ひ～～
『あ…あぁ……うあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！』

「んはぁぁぁっ♡あひゃっ♡
ひゃううんっ♡いひぃいいいいっ♡♡」

ズボズボ

「おい、マ○コがどんどん緩くなってきたぞ、
もっとキツく締めやがれ雌豚、ホント役に立たねぇなぁｗｗ」

「はひぃいっ♡締めましゅっ♡
オマ○コぎゅって締めましゅうううううううっ♡♡」

（あぁぁぁんっ♡叱られることも喜びになっちゃう♡
わ…私もう完全にご主人様の虜なんだわ…♡♡）

あぁ

おほ

べべ

「おらぁ！イクぞイクぞ、気張りやがれよ！」
「はひぃぃぃぃぃぃぃんっ♡
お言いつけ通り淫乱ま○こキツくして
ご主人様をイカせしましゅうううっ♡」
ぞく
ビュ――!!
「んおっ♡おっおぉおおおおおおおおおおおおぉおんっ♡♡」
ぞく

「えひぃぃ…♡ひぉぉぉ…おぉん♡んひぃ♡ひぃ♡ひへぉぉぉぉ♡」

（ひゃぁぁぁ…わ、わたひイクのがどんどん早くなってる…♡
ご主人様好みのメス奴隷に調教されてるんだわ…あぁ、素敵い♡）

「おいおい何惚けてるんだよ、まだ使える穴は残ってるだろう？」

「は、はひぃ♡申し訳ございませんっ♡」

「ど、どうぞご主人様のお好きなように変態ひたぎの
尻穴マ○コを躾けてくださりませぇ♡」

ゴポォン

ヒクヒク

ヒクヒク

「よぉし、ありがたく受け止めろよ！」

ズブブブブブブブブゥゥゥゥゥゥッッ！！

ズボオオ！

「んひょっ♡ひょほおおおおおおおおんっ♡♡」

（あぁぁぁぁぁぁっ♡♡
尻穴っ♡尻穴マ○コきひゃぁぁぁぁぁぁっ♡
第二の性器しゃいこぉぉぉぉっ♡♡）

ぶくぶくぶく！

「んひょっ♡ほっ♡おひょっ♡ひょおおおおおおおっ♡」

（あぁぁんっ♡お尻拡がっちゃうぅぅ♡
極太チ○ポでお尻ガバガバにされちゃうのぉぉぉ♡♡）

「ゲヘヘッ、大分ケツの穴でも感じられるようになったじゃねえかw
おらおら、ここがお前の弱点なんだろ？」

「ひゃひぃい♡ケツま○こ気持ちいいれしゅうぅう♡
育ててくださったご主人様には感謝しかありまひぇんっ♡」

「ひゃひいいいいいいいいいいいいいっっ♡♡」
びくびくっ!
おっ
びゅるるーーっ!!
「イキュうううっ♡
尻穴マ○コイキまきゅるうううううううっ♡♡」
びくっ!

「おへぇぇぇぇ♡ひ…ひぃぃぃぃん……♡
せ…精液いっぱい…わたひの穴に注いで下さって…ありがとうございますぅ♡」

「グヒヒ♡もうすっかり俺の虜だなw
この間まで付き合っていた彼氏のことなんて忘れちまったんじゃないのか？」

「はぁい♡ 阿○々木くんの事なんてぇ…も…どうでもいいれしゅぅぅ♡
ご主人様がわたひの全てれすぅぅぅぅ♡」

（あぁん、気持ちいい♡
愛した人を裏切って雌豚として振る舞うのが最高に気持ちいい♡
わたし…こんなクズ人間だったらんてぇ…♡）

「はぁぁぁぁぁん♡これからもお好きな時に
好きなだけ可愛がってくださいましぃ♡ご主人様ぁぁ♡♡」

【　某月某日　　阿〇々木宅　　深夜2時……　】

「うぅっ…うあぁぁぁぁぁぁ……あぁぁ……」

「せ…戦場ヶ原……だ、ダメだ……
そっちに行っては……うぁぁ……待ってくれぇ……」

「……きて……起きて……起きて、阿良〇木くん……」

ガサ

ガサ

「せ……戦場ヶ原……？」

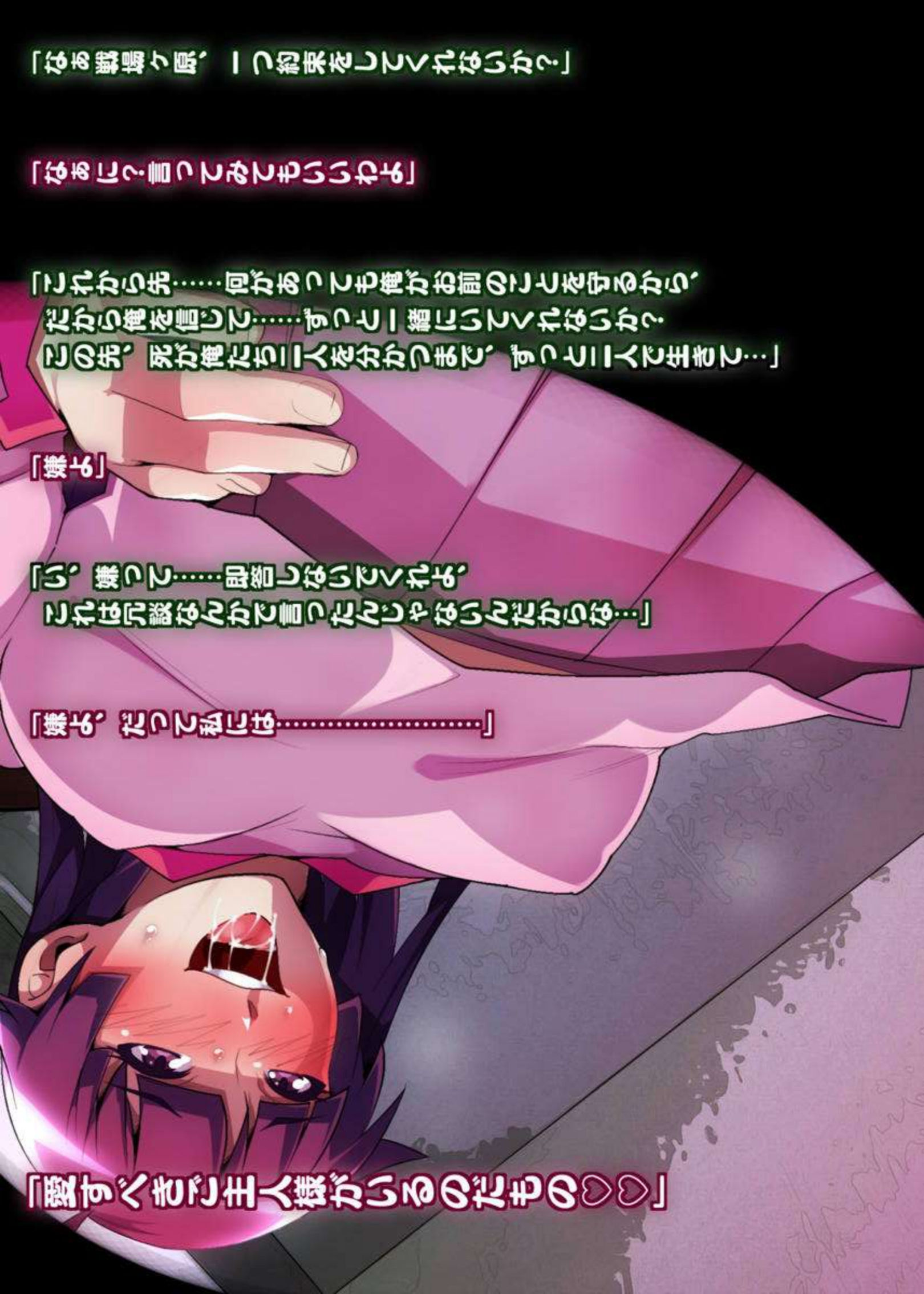
「せ、戦場ヶ原！？今までどこに……！？」

「？　何を寝言を立ててるのかしら？
わたしはさっきから寝坊助の目の前にいるのだけれど？」

「そ…それじゃさっきまでのは……夢……
よ、よかった……」

「何を安心してるのか分からないけれど急がなくていいの？
このままじゃ学校に遅刻してしまうわよ」

「そ、そうだった、急いで着替えないと……」



「なぁ戦場ヶ原、一つ約束をしてくれないか？」

「なぁに？言ってみてもいいわよ」

「これから先……何があっても俺がお前のことを守るから、
だから俺を信じて……ずっと一緒にいてくれないか？
この先、死が俺たち二人を分かつまで、ずっと二人で生きて…」

「嫌よ」

「い、嫌って……即答しないでくれよ、
これは冗談なんかで言ったんじゃないんだからな…」

「嫌よ、だって私には……」

「愛すべきご主人様がいるのだもの♡♡」

「んひぃぃぃっ♡ひぃんっ♡ひぃぃぃんっ♡」

ぴくン

「せ……戦場ヶ原ぁぁ！」

「あ、元カレ君やっと起きたねw
幸せそうな顔してたからよっぽどいい夢見てるんだと
思って起こさなかったんだよ♡」

「お、お前！お前が戦場ヶ原を犯してたのか！？」

「犯すなんて人聞きが悪いなぁw
これは同意の上でのラブラブエッチなんだよ、なぁ雌豚？」

「あひゃぁぁんっ♡気持ちいいっ♡
ご主人様チ○ポよすぎれしゅううううう♡♡」

「ハハ、聴こえてないかw」

ズコズコ

あぁ

ぴく

ひっ

ヴィ〜！

「待ってろ戦場ケ原…僕が今すぐ助けて……ぐぅぅ…！」

「グヒヒ、起きられないだろ？
君が寝てる隙に身体を麻痺させる薬をたっぷり
塗りつけたからねぇw」

「それにこれは合意だって言ってるだろ？
こいつもこんなに嬉しそうに……なぁ雌豚ぁ？」

「んほおおおおおおおおおおおおっ♡」

「ひゃ、ひゃひぃい♡
ご主人様チ○ポで可愛がっていただいて…っっ♡
ひたぎは世界一の幸せ者れしゅうぅぅぅっ♡」

「そ、そんな……嘘だろ……？」

ズコ
ズコ
ズボ
ズボ
へおお

「それじゃ俺たちはそろそろ行くかな、
おら雌豚、元彼に最後のお別れをいいなw」

「ひぉおおっ♡
ひゃ、ひゃひぃ、ご主人様ぁっ♡」

「おひぃ♡ご、ごめんね阿良○木くぅん♡
あなたの事は愛していたけどぉ…でも極太○ンポの前
ではあんたなんてゴミカスも同然なのぉ♡」

「せ…戦場ヶ原……？」

「んひぃぃっ♡イクイクっ♡
もうイッちゃいまひゅぅぅぅぅぅぅぅっ♡♡」

ズボ
ズボ
ズボ
ヴヴ
おほぉ
んお

「おひょおおおおおおおっ♡♡
イキュうう♡お漏らし絶頂しちゃうううっ♡」

ビュルル!!

「んひょっ♡ひょひょっ♡♡
ひょっひぃいいいいいいっ♡♡」

びくびく!

ぐぎぃぃ♡

「なんとか体勢だけは維持できたな、今回は及第点をやろうかw」

「おほぉぉぉぉ…♡
あ、ありらと…ごらいまひゅう…ご主人様ぁぁ♡」

ズブゥ

「そ…そんな…あの戦場ヶ原が…こ、こんな……」

「ゲヘヘ、こんな淫乱になってショックかい？
まぁこれに懲りたら一人寂しくマスかいて生きていくんだねw
さぁ、行くぞひたぎ♡」

「はひぃ♡ご主人様の仰せのままにぃ…♡♡」

「ま、待ってくれ…！戦〇ヶ原、行かないでくれっ！！」

ヘコヘコ

ヘコヘコ

ヘコヘコ

「頼むっ！お願いだから！行くなっ……！行くんじゃない……っ！」

「・—・—ぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ」

FIN

レ…

ジー

バン！

ヌレ
ヌレ

ヴイイイイ!!
ぬぬぬ!

ビュルル
ビュルル

トロ〜

ぺくぺく♪
きゅん♪
ハア♪
ハア♪

ぎっ
ギチ
ギチ
んぁ。
ぶくん!

ズコ
ズコ
あっ
んあ
ぺく
ぺく!
ゾクゾク

ズボ
ズボ
ズボ
ズボ

ズゴ!ズゴ!
ズゴ!
ズゴ!
ひィ
いゃ

ビュッ!
ズゆぶ〜〜!!
ひょっ
おひっ
ゾクン

ブシーン
ハヒ
ヒィン
ハヘェェ
ゾクゾク

んっ
あっ
ゾクゾクゾク
ズコ
ズコ
ズコ

ハァハァ
ドピュッ

ハァ
ハァ
ヌルゥ

ズ!
ズ!
ズ!
ズッ!

ズッ!!
ズッ!!
ズッ!!
ズッ!!
ズッ!!

ぎぃ
ズッボ
おお!
ズッボ
ズッボ

ビューーー!!
おんぉぉぉ

ハァハァ
ハァハァ
ヴヴヴ
ヴヴヴ
ヴヴヴ
ヴヴヴ
ヌロォ

ぐぐ!
ぐぐ!
ジクン

ぴくぴく
れちゅ
ちゅろろ

ボッ!
ズブ!

おごぉ!!
ズッボ!
ズッボ!
ズッボ!
ズッブ!

ビく
おぇぇ
ぇ
ドロ〜
ゴブゥ

ペロペロ
ペロペロ
ハアハア
ハアハア

ヒュオオ…

ギュ!
ぐぐぐ
くぃ
くぃ

ああ

ズくズく!
ズく…!!
ズビュッ!

ハッ！
ハッ！
ビクビク

ビビッ!
ビッ!
ズ<!

ズイ！
ハキ！

ハァ!
ハァ!
ぐぐぐ。
やあ!

ズ
ズ
ぐぅ!
ぐぐぐ!

ビビッ
ビッ

ハァ
ハァ
ビキ
ビキ〜
くばぁ〜

ギュ!
ぶくん
ぶく ぶく

おごじ
ぶくぶく!
ズボォ!
ぶくん!

ん…っ
ズ…!!
ズズ…!!
ズズ…!!
ぁぁっ
ぐぐ…!

ビュルル!
ぶくく!

ぴく!
ぴくん!
キィィ
ヴヴ
ヴ!

ビュル!
ゾクゥ
ヴィーー

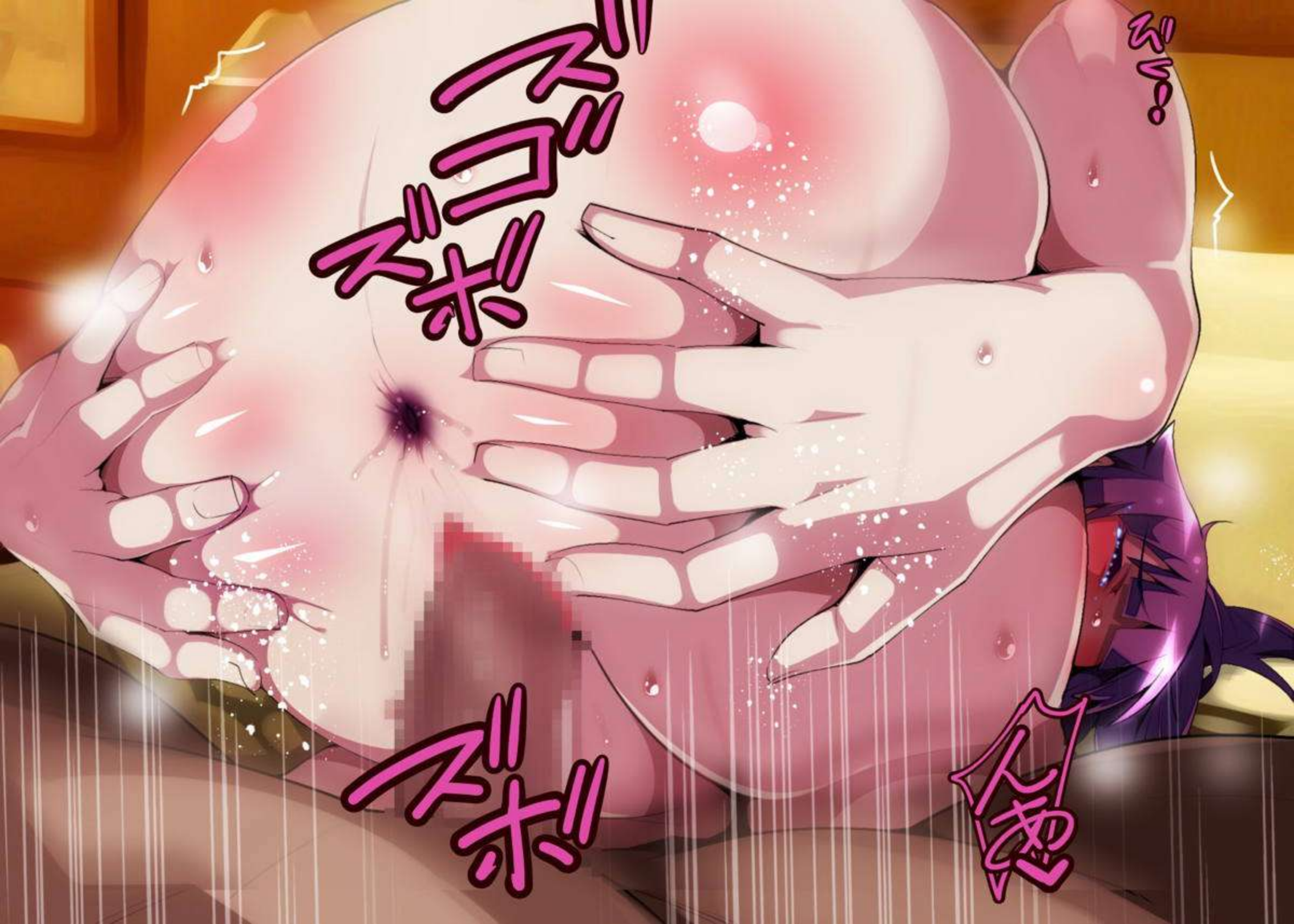
やらぁ♡
ぐいっ
ぴくぴく!
ヴィーーー!!

あぎ♥
んおおっ♥
ブシャ
ゾクゾク

びくっ
おほぉ♥
びくびく♥
しょろろ〜♥

くぱぁ

ブルル


ズゴズボ!
ズボ!
んぁ

ブジュウ!
ぶくん!
ぶくぶく!
おごー!?

ヴ〜〜!!
ズボ
ズボ

びく!
びくっ!!
ンホオォォ♥♥♥
ビュブー!!

ぺく
ぺく♥
コパァ
ドブゥ♥
ぺぎぃ♥
ぺぃ♥

ふっ
ふっ
レロレロ
ちゅうう♡

ぷくん
ズッ
ズッ
カチャ

キーゆ
ズッ
ズッ

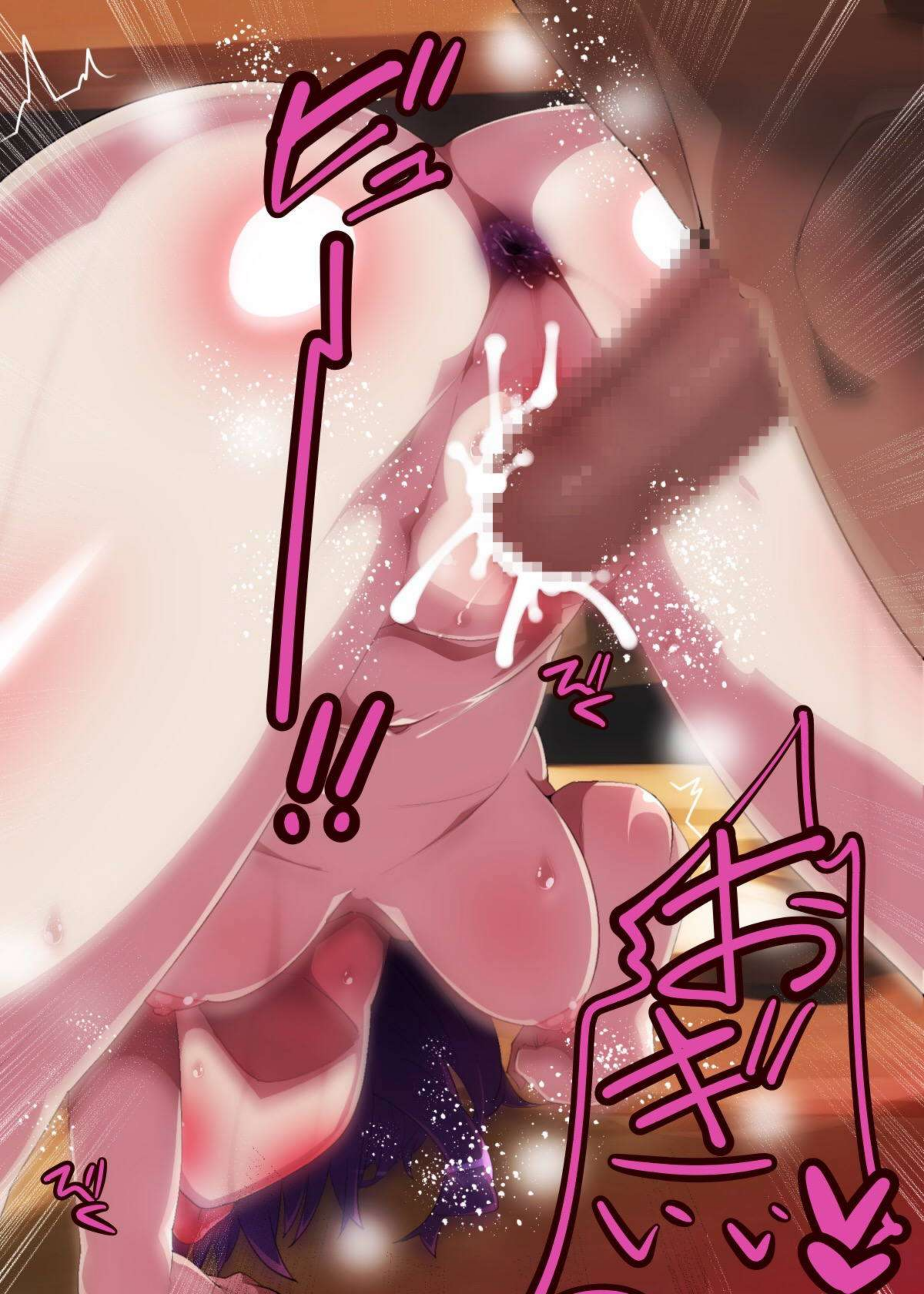
ズコ
ズコ
ベレーロ!
ベレ!

ズボ
ズコズコ
あぁ
ぎゅ

ビュー!!
ビュー!!

はへ〜〜
ひ〜〜

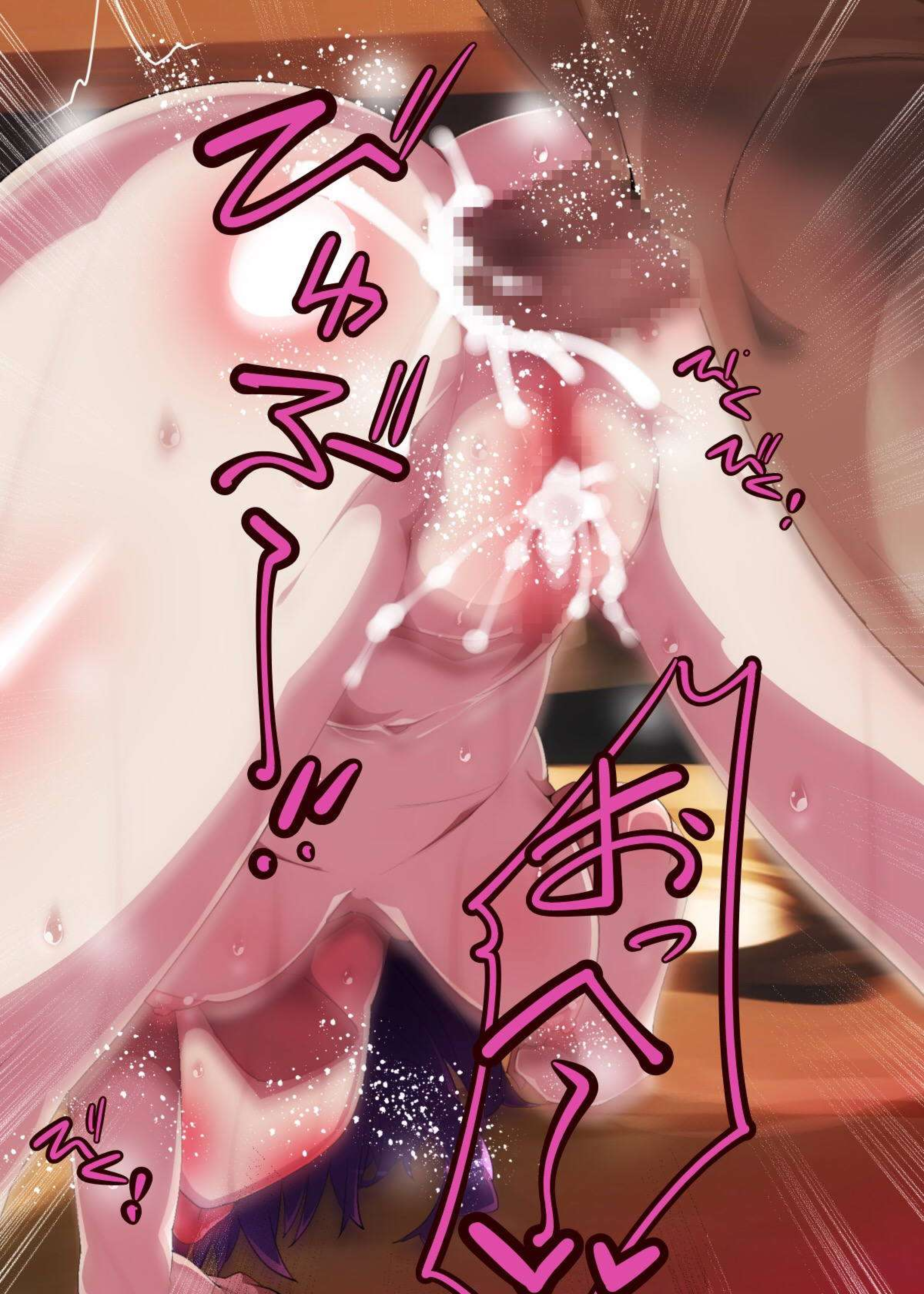
ズボズボ
おほ
あぐ
ぬぐぬぐ



ハァ
ハァ
ヘキ

ぃゃぁ
ぃゃ
ぃゃ
ぃゃ

ズブ
ズブ
ズブ
ズブ
びく びく
お゛く♥
んお゛



びゅる゛ー゛
ぴくびく！
おっ♡
びく！

ビクン
ビクン
ビクン
ビクン
ビクン

がが
がが

ぬ
ぬ
ぬ
ズコズコ
ヴィ〜!

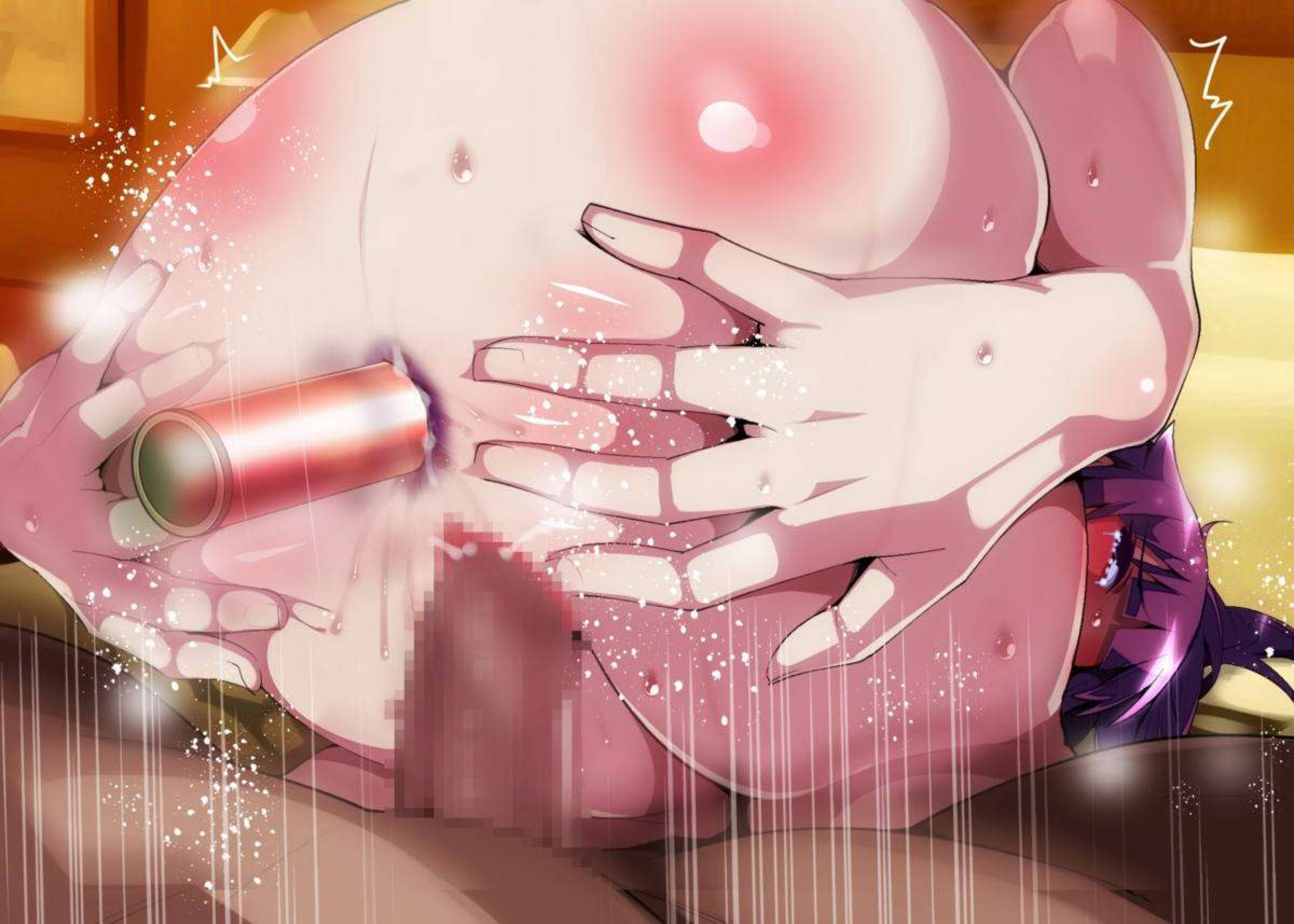
ぴくぴく
ズコ
ズコ
ズボ
ズおおお

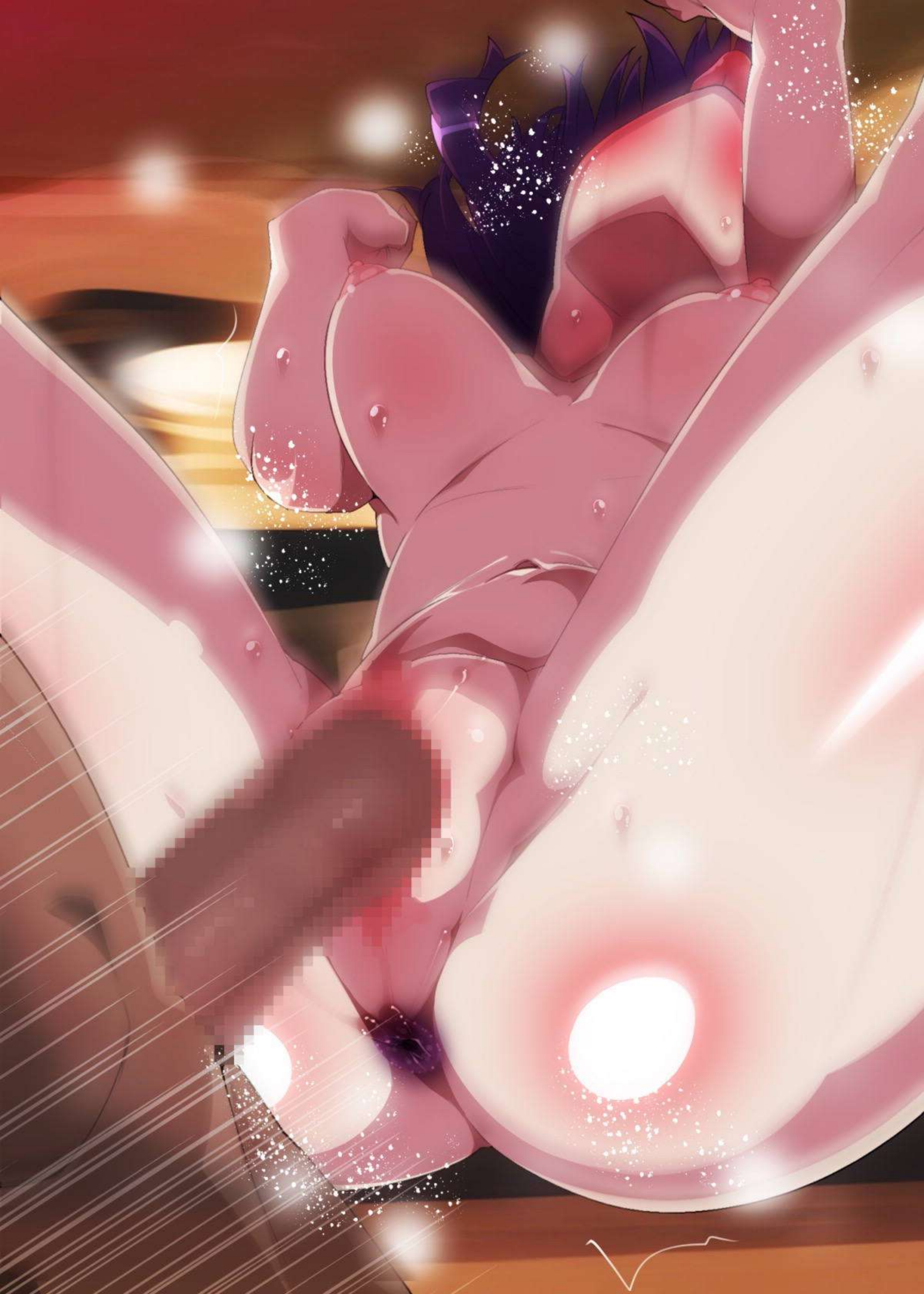
んお
おほぉ
ズボ
ズボ
ヴヴ

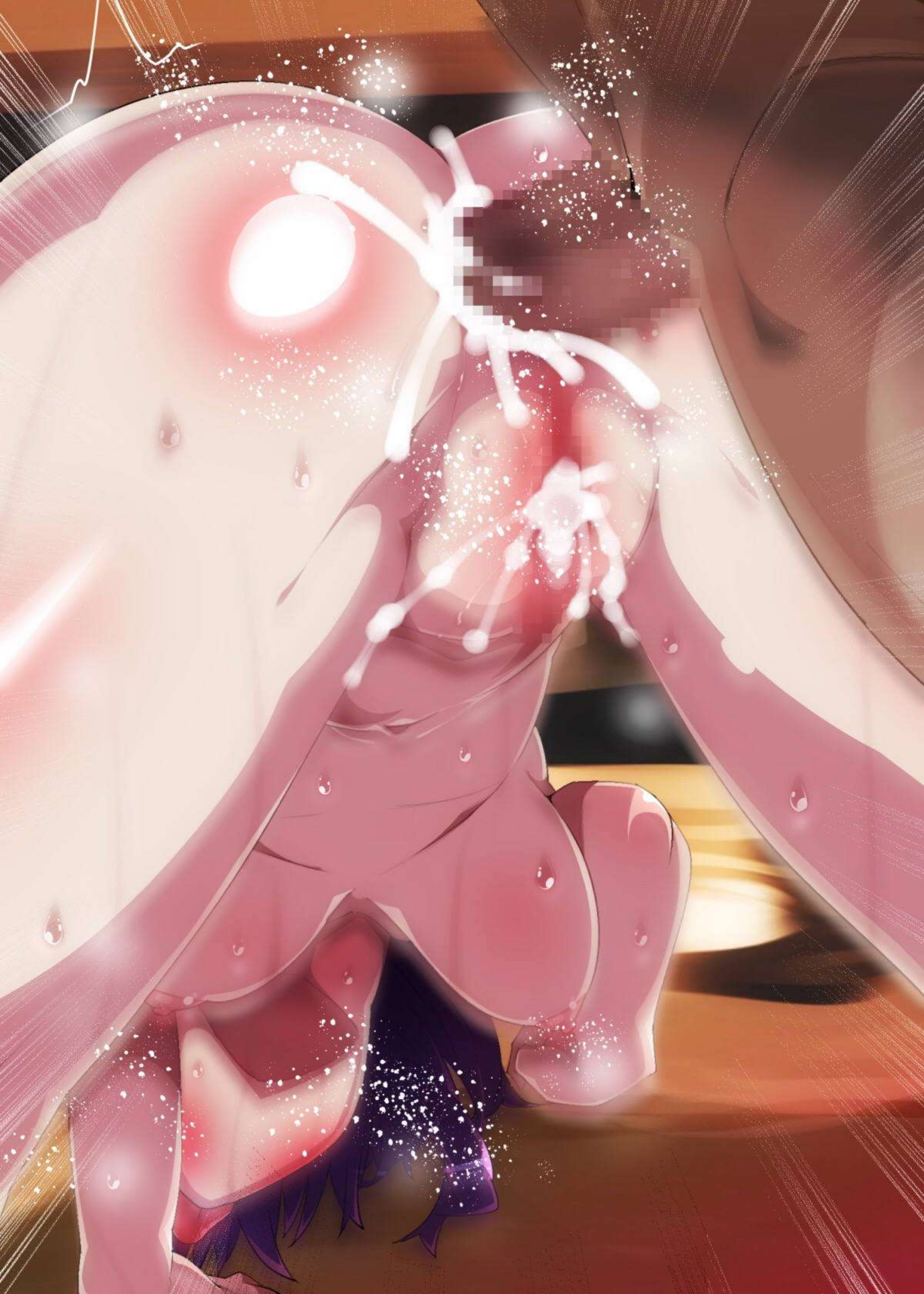
ビュルル!!
ぺくぺく!
ぺぎぃぃ♥

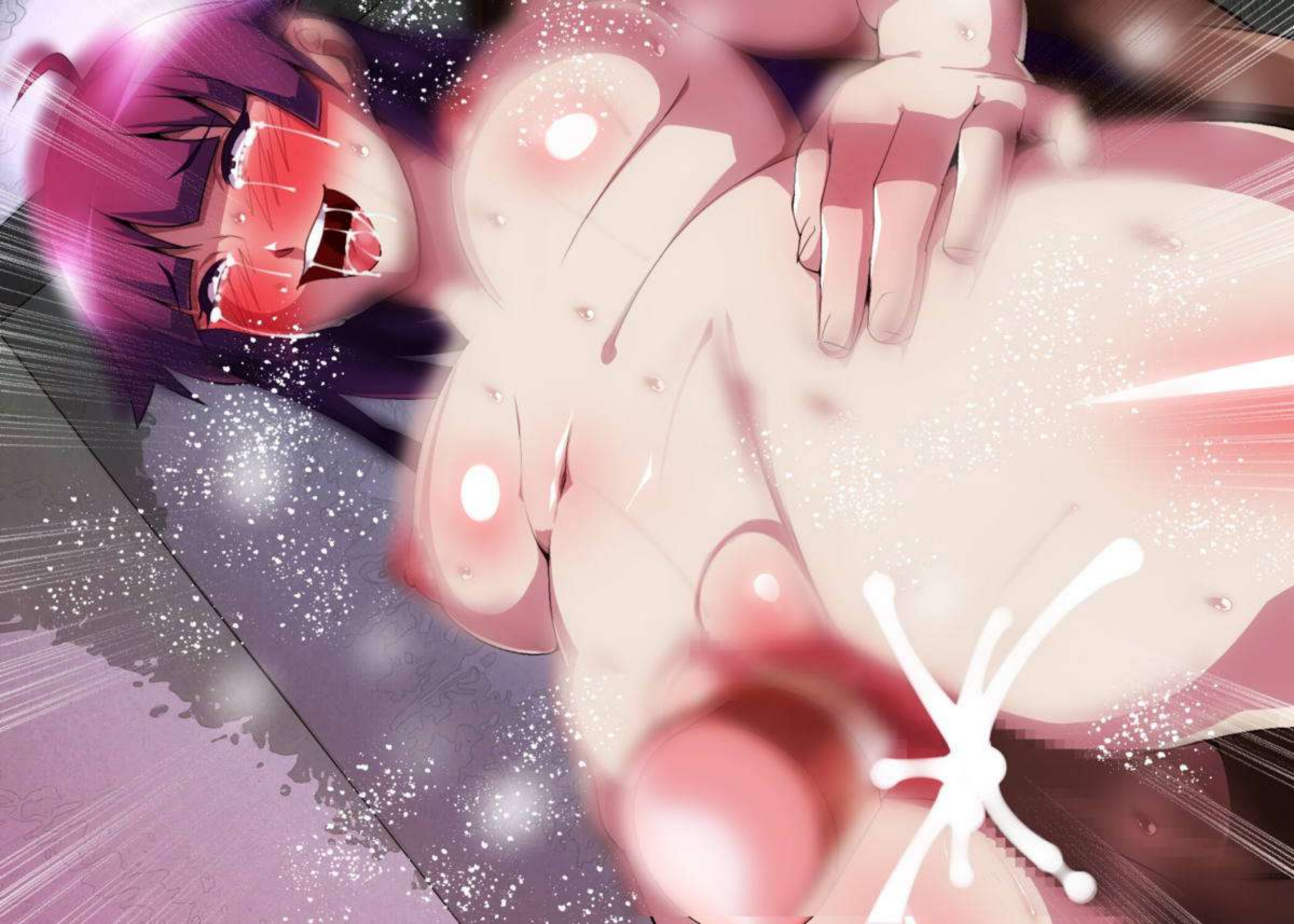
ズブ
ズブ
ズブ
ズブ

FIN









FIN